


 書評

内海 健 著

精神科臨床とは何か

日々新たなる経験のために

鈴木國文

次の頁、次の頁へと読む者の興味を誘い、本を置く暇を与えない専門書に会うことは少ない。この本はそうした稀な専門書の一つである。

なぜそのように読ませるのだろうか。それはこの本が、きちんと読み手のために書かれた本だからである。専門書は、往々にして書き手のために書かれ、読者はそれを苦勞して拝読ということになりがちである。この本のように、読み手に対する明確な配慮を備えた高度な思考に出会う幸運にはなかなか恵まれない。しかし、「読み手のため」と言っても、これは単なる入門書、啓蒙書の類ではない。ほとんどすべての頁で、精神病理学最前線の問題提起がなされ、読む者の知的関心を次々と挑発してくれる。

精神科臨床において、最も重要なことは「わからないこと」を「わからないまま」に持ち続けることだと評者はかねがね考えてきた。しかし、それは容易な道ではない。この本は、「我々にわかる苦しみ」の、もう一つ奥にある「我々にわからない苦しみ」、患者の持つそうした苦みを巡って、それを単に畏怖するだけでなく、韌性のある思考力でそれを考え抜くという、精神科臨床の真の醍醐味を実に見事に教えてくれる。そして、その一方で、その「わからなさ」が、単に病者のみのものではなく、実は人の精神の持つ「根源的不可解さ」でもあるという構造を、正当にも、おさえている。

たとえば、著者は「(人は)自分が個体として死ぬのだという知をもってしまったのです。それゆえ、その死というものを象徴化しないわけにはいきません」と書く。そして、こうした認識を出発点に、「言葉」と「精神」とのかかわ

りを論じ、その上で、統合失調症者が臨床の場で体験するいくつかの困難について、「行方不明の言葉」「張り付く言葉」といったわかりやすい表現で描出してみせる。また、うつ病についても、主体の成立という契機に人が被る「根源的メランコリー」という問題を取り上げ、この「根源的メランコリー」をわかったつもりにならないことが、うつ病の臨床においていかに大切かということを解き明かしてみせる。

こうした理解のあり方は、「幻聴」あり、「抑うつ」あり、というように「患者の言うことをただ医学の言語に翻訳して登録することよし」とする医療とは大きく異なるものである。「既知のもの」があることを確認する作業と「未知のもの」があることを見据える作業とがいかに異なるか、この違いを認識することは、患者に対する医療という点で重要なだけでなく、実は、精神科医にとっても、臨床をいつまでもおもしろくする秘訣なのである。

もう一点指摘するなら、この本は師弟関係の産物でもある。著者の後書きによれば、『精神科臨床とは何か』というこのタイトルは、構想の段階で土居健郎先生がお考えになったものだという。このタイトルが著者に与えた枠組みこそ、この「真に臨床に必要な書」を生み出した重要な鍵であろう。この本は、掛け値なく、いますべての精神科医に読んでほしい本である。

そして、同時代に内海健という書き手がいることを、評者は、自身の幸運だと思う。

(名古屋大学医学部保健学科)

●A5 232頁 2005 定価 2,625 円 (本体 2,500 円+税) 星和書店